



## 『紅高粱家族』読後



土屋 肇枝

1

莫言の「紅高粱」については、よく引用される残雪の手厳しい批判がある。

思うに、ああした原始的な民俗、神話の類いに粉飾を加え、いい加減にでっちあげ、生命そのものの衝動に見せかけたまがい物は、我々の民族にとって、麻酔薬にほかならない。それはべつに目新しいものでもなく、魯迅が数十年も前に描いた阿Q精神の延長でしかない。『赤いコーリャン』が強調するのは、我々の「昔の羽振り」はよかった、大したものだったということなのだ。……（中略）…… やりきれない気持ちで一度ならず思ったものだ。中国人に自分自身を見せ、外国人にありのままの中国人を見せるのは、盲目の人に太陽を見せるのと、おそらく同じなのだ、と。古くからの歴史の大河の中で、『赤いコーリャン』は正にこうしたまぼろしの水の泡にすぎない。それは多くの人々に幻覚を見せ、かなりの程度まで真実を粉飾した。この手の泡がこの河にはまだいくらでもある。人目をひきはしないが、いずれも大同小異だ。<sup>\*1</sup>

残雪は、「紅高粱」のなかに「民俗、神話の類いに粉飾を加え、いい加減にでっちあげ、生命そのものの衝動に見せかけた」話しを見つけ、だからこの小説は「人々に幻覚を見せ」る「まがい物」である、と批判しているのだ。残雪がどのあたりを指して「まがい物」と言っているかは大体の見当がつく。しかし、それを語っているのは語り手である（我）であって、小説の作者ではない。この二者ははっきりと分けて考えなくてはいけない。語り手によって紡がれるこの小説の重層性を度外視して、あらゆる叙述を同じ地平に並べて論じようとするこのような批判は、語り手の「物語」に絡め取られ作者と語り手（我）を混同してしまった者の言葉であり、まとはずれと言うべきであろう。

り近くまで「爺爺」ではなく「余司令」と呼ばれていたではないか——に対し説明を加えておきたい。「紅高粱」最終部に至っての称呼の変化に、わたしは語り手（我）の戸惑いやいらだちが感じ取れる。というのも変化はなしくずし的に行なわれるからである。瀕死の祖母の回想の中でたぐられる初めての抱擁をきっかけに、称呼は語りの重層性を無視して一律「爺爺」へとなだれ込む。

（瀕死の祖母による回想）余占鳌は、荒々しく祖母の胸当てを引き裂いた。降り注いできた光の束が、祖母の冷たく張って一面白く鳥肌だった乳房を照らした。彼の力強い動きの下で、鋭い痛みと幸福感が祖母の神経を鍛えあげた。「神様…」。祖母は低く叫ぶと、気を失ってしまった

祖母と祖父が生氣あふれる高粱畑で愛しあったことは、喜びを共にした肉体よりも、世のならいをものともせぬ、二つの自由な魂をより強く結び付けた。……（中略）……

（戦闘中の高粱畑で）天国から下された不思議な輝きが彼女の眼にきらめいた。父の黄金色のほほと祖父によく似た二つの目が見える。祖母はかすかに唇を動かし、「豆官…」と呼んだ。（「紅高粱」）

〈我〉は祖父を「余占鳌」と呼び続けることに疲れを感じていた、とわたしには思われる。「余占鳌」と呼んできたここまで、〈我〉は彼に寄り添うことができず、まったく外見なことしか語れないでいるのだ。たとえば、「余司令は言った」「余司令は拳銃の引き金に手をかけた」「余司令は無表情のままだ」「余司令は任副官のプロローグ銃を手につまでも黙っていた」。これらはいずれも第三者的な描写ばかりで、〈父親〉と呼び〈奶奶〉と呼ぶ豆官、戴鳳蓮の躍動的な描写ときわめて対照的である。〈我〉は祖父を三人称で区別し、寄り添えないでいるいらだちを早く解消してしまいたい、そのきっかけを欲していたのである。

〈爺爺〉と呼ぶことで祖父に対する〈我〉の違和感は薄れ、〈我〉の推測ではない祖父の内面が語られはじめる。

機関銃が祖父と祖父の部下たちを圧倒する。軽率にも土手の上に頭を出した幾人かの隊員は、もう土手の下で死体になって転がっていた。祖父は怒りで胸がいっぱいになった。自動車は全部橋の上ののり、機関銃の弾が高めに

われわれ読者は、語りの中で積み重ねられていく逸話の中の「粉飾」された「民俗、神話」や「まがい物」から強烈な印象を受けとったわけではない。たしかに種々の逸話——たとえば、羅漢大爺の死（「紅高粱」）、余占鰲と戴鳳蓮のなれ初め（「紅高粱」）、花脖子との対決（「高粱酒」）、井戸に隠された母の体験（「狗道」）、祖母の葬式や鉄板会（「高粱殞」）、成麻子の受難（「狗皮」）、二奶奶の凌辱と変死（「狗皮」）など——は、どれも読者の関心をかき立てるに充分の奇景を見せている。しかし、語られた逸話よりその語り口の方が何倍も印象的あるいは強迫的ではなかったろうか。錯綜した語り、色彩表現、生々しく醜悪な描写、どれも読者の肌に直接訴えかけるような強烈さを持っている。しかもそれは単なる印象にとどまるのではなく、この小説を読み解く重要な鍵になっているのである。

## 2

まず、語りのアウトラインから説明していきたい。『紅高粱家族』に収められている五つの中篇は、いずれも〈我〉が一九三九～四一年<sup>\*2</sup>にかけての戦争期を話の軸にしながら、自分自身の祖父—余占鰲、祖母—戴鳳蓮、父—豆官、母—倩兒と彼らをめぐる人々の逸話を織り込むように物語る——つまり〈我〉が語っている現在／中心になる物語／逸話、という三つの時間軸をもつ——構成になっている。舞台は五篇とも高密県東北郷という架空の農村であるが、余占鰲や豆官らの逸話を孫であり子である〈我〉が物語るというスタイルを持つものなら、時代・場所を問わず一連の作品といえよう<sup>\*3</sup>。そして『紅高粱家族』が語り手〈我〉によって束ねられているということは、単に語りの表面的スタイルにとどまらない重要な要素なのである。

小説を読み解くうえで欠かせないこの〈我〉が、自分自身についてや直接体験を語ることはほとんどない。むしろ語っている人物に寄り添い食欲に彼らの生を共に生きようとする。それはあたかも語りの中に溶け込み一体と化してしまったかのようにさえ感じられるのだが、われわれ読者は語りの中に身を没すことはできない。なぜなら、すぐ称呼——爺爺、奶奶、父親、母親、曾外祖父、曾外祖母、小舅舅、小姑姑——によって語り手の場所に引き戻され、〈我〉の存在を確認させられるからである。文中にほとんど姿を現わさない〈我〉が大きな存在感を与えるのは、この親族称呼に起因しているといえよう。

ただ、ここで予想される一つの疑問——「紅高粱」で余占鰲はほとんど終わ

飛んでくる。

(「紅高粱」)

次章の「高粱酒」からは、祖父の描写も父、祖母同様自由闊達になる。

このように〈我〉が称呼への欲望を持つことは、〈我〉の存在が称呼によって裏付けられていることと同義である。そして何故称呼への欲望を持つかといえば、それが〈我〉が希求し回復しようとしている世界——この世界が、語り手の祖父母らの英雄的な描写によって彩られていることから、以後「英雄世界」と呼んでおく——への通路と見なされているからである。あるいはまた称呼＝血縁＝連続性の欲望と見ることもできる。つまり〈我〉は血縁によって「英雄世界」との一体化を企てたのである。

〈我〉は、血ほど「英雄世界」と自分とを直接結びつけるものはないと思っているし、実際結びついていると信じている。しかし、血縁＝称呼による「英雄世界」の回復には大きな落とし穴があった。〈我〉は祖父、父、祖母、多くの登場人物に寄り添い、彼らの内面を自由に語りだす。だが、限りなく彼らに寄り添うことはできても決して一体化することはできない、なぜなら称呼がそれを妨げてしまうからである。曾祖父母—祖父母—父母—わたし、称呼とは必然的に距離を生み出してしまうものなのだ。われわれ読者は、〈父親〉と聞かされたとたん、〈父親〉と〈我〉の二人を同時に感じる。いや、正確には〈我〉と、〈我〉との距離を感じるのだ。けれども〈我〉には、称呼が「英雄世界」との間に距離を生むのだということが自覚されず、一体化できない痛みだけが別の文脈をまとめて表現される。それが「種の退化」である。

これを〈我〉は次のように語る。

数十年変わることなく、暗赤色の一隊は、高粱の茎をぬって行き来し、網を張った。彼らは殺し、略奪し、熱い忠心を祖国に捧げた。彼らが演じた壮烈な舞劇一幕一幕が、今を生きるわれら不肖の子孫のふがいなさを際立たせる。進歩する一方で、わたしは痛切に種の退化を感じるのだ。(「紅高粱」)

〈我〉が痛切に感じているのは、祖先の輝かしさでも子孫のふがいなさでもない。二つの間に存在する距離感こそが痛切に感じられているのである。しかし〈我〉自身がこの「種の退化」を「子孫のふがいなさ」と解釈しその文脈で説明してしまっていることが、残雪に見られるような「『昔の羽振り』はよかつ

た」式の誤解を生み出してしまった。「子孫のふがいなさ」という〈我〉の解釈は、一体化できない痛みを言葉にした「種の退化」という表現が引き寄せてしまったものであって、その解釈が先にあったわけではない。「種の退化」とは、血縁によって結ばれているはずの「英雄世界」との距離感を、〈我〉がやはり血縁にかかわる表現——種（＝血縁・繋がり）の退化（＝遠さ）——を使って捉えたと理解すべきものなのである。

### 3

称呼が必然的に生み出した「英雄世界」との距離感に、〈我〉がなんら手を打たなかったわけではない。もちろんそれは意識下でのことだが、なんとかその距離感を消し去り、一体感を回復しようとしている。わたしはその無意識的な行為が、この小説の色彩表現や生々しく醜悪な描写と深く関わっていると考える。

まず色彩表現だが、小説中の多彩な色使いは多くの論者が特徴の一に数えており、なにより文章を見てもらえれば語り手がいかに色でモノをとらえているかが了解してもらえらると思う。

旧暦八月九日の半月がもう空にかかっており、冷たい月の光が祖父と父の背中、そしておおいなる不器用者の漢文化のごとく重々しい墨水河を照らしていた。血の混じった水に気を高ぶらせたウナギが河でびよんびよん飛びはね、銀色の弧光が河面を跳ねる。河から湧いてくる青い冷気と高粱畑から満ちてくる赤い暖気とが土手でぶつかり混ざりあって、透きとおった薄い霧になった。

（「高粱酒」）

昨夜ろばに乗った旅医者ポケットから捜し出した赤と緑のガラス玉二個のうち、父は緑のを福来にあげた。福来は宝物でも得たかのように、その玉をずっと口にくわえ、舌の先で転がしていた。そのガラス玉が福来の口から流れ出る鮮血の中で、ひすいのような緑、緑そのものとなって、伝説の中の神狐が吐き出した仙丹のように緑光をきらめかせていた。（「高粱殞」）

色については、先に平石淑子氏が「紅高粱」の色彩を分類し、莫言作品の分析を試みており、「紅高粱」の中で使われている色は72色、単色より色を組み

合わせることでより強烈な印象を与えることや、紅と緑の補色関係とそれらの象徴的な意味について言及されている\*4。

ただ、私がここで重視したいのは、文中の補色関係をはじめとする色の対比——たとえば、赤と緑、白と赤、白と黒など——の引き起こす効果が、情景のあざやかさといった視覚的体外的な感覚よりも、むしろわれわれの筋肉の緊張という体性感覚によって皮膚の内に刻まれる点である。そしてさらに、これらの色彩表現を補強するように臭覚・触覚・味覚がつぎつぎと動員され、われわれの感覚を刺激する。それが多くの生々しく醜悪な描写をいっそう際立たせるのだ。

ろばが蛤蟆坑に差し掛かると、悪臭が鼻をつき、あまりの臭いにろばまでが耳を垂らしてしまった。祖母はあのおいはぎの死体を見た。腹は大きく膨れあがり、緑色の蠅がおいはぎの皮膚を覆っていた。祖母を乗せたろばが腐乱した死体のそばを駆け抜けると、蠅は怒って緑の雲のように飛び立った。

（「紅高粱」）

さいわい黒雲が一つ流れてきて、太陽をさえぎり、入江の水は金色が褪せて、深緑に変わった。大きな黒い物体が二つ、あぶくの湧き上がったところにゆっくりと浮かんできて、水面に近づくと急に速度を増した。まず二つの尻がぼっかりと現われ、くるっと裏返って、単父子が膨れあがった腹を空に向けた。顔は水面に出るか出ないかぐらいで、まるで恥ずかしがっているみたいだ。……（中略）…… 羅漢大爺が熊手で単父子の太ももをつかみ——熊手が肉につきささるブスッという音が、酸っぱい杏を食べたときのような唾液を口に広がらせた——ゆっくりと引き寄せた。

（「高粱酒」）

例をあげるには事欠かないほど『紅高粱家族』は生々しく醜悪な描写に満ちている。いや、生々しい・醜悪というより、それは暴力に近い。『紅高粱家族』は暴力に満ちている、と読むべきだろう。背景となっている戦争や闘争はもちろん、対立、無数の肉体の破壊、血、凌辱、そして死が語り口そのものの中に、克明に刻み込まれている。物理的な面だけではなく、祖父と祖母の愛情のもつれ、黒眼と祖父の反目、二奶奶とイタチの攻防、といったように精神的な部分にも暴力が導入されている。〈我〉が、執拗かつ詳細に暴力の現われを語ることは、語りの中に暴力を存在させ間接的に暴力を行使していくことであり、こ

の暴力が〈我〉を突き抜け、われわれ読者の感覚までをも侵犯するのである。

では、何に対してその暴力は向けられているのか。それは「英雄世界」を構成しているもろもろの要素——人、物、高粱畑——にほかならない。そしてわたしが思うに、この暴力を行使することで〈我〉はかろうじて「英雄世界」との一体化を確認することができるのである。あるいはこう言うこともできるだろう、〈我〉と「英雄世界」という隔てられた次元を、暴力という変換の契機を得て混沌の中で同化させようとする試み、または距離感を消し去ろうとする試みである、と。

#### 4

ならば、「英雄世界」つまり〈我〉が希求し一体化しようとする世界とはどのようなものであろうか。まず注目しなくてはならないことは、始めにも触れたが、〈我〉の求めている「英雄世界」と〈我〉が語り紡いだ「物語世界」は同一物ではない、ということである。もちろん、われわれ読者に提供されたのは「物語世界」だけといえるが、この中に「英雄世界」への熱い郷愁を、〈我〉が直接自分の言葉で語っている部分を見つけることができる。

かつて、わたしは高密県東北郷を愛しきっていた。高密県東北郷を憎みきっていた。大人になってからマルクス主義を一所懸命に学習して、ついに悟った。高密県東北郷はまぎれもなく地球上でもっとも美しくももっとも醜く、もっとも超俗的でもっとも俗っぽく、もっとも清らかでもっとも汚らしく、もっとも雄々しくももっとも破廉恥で、もっとも酒をくらいももっとも愛しあえる場所だったのだ。この地に生きるわが郷党たちは高粱を好んで食し、毎年大量に植え育てた。  
(「紅高粱」)

〈我〉の郷愁は、美と醜あり、超脱と世俗あり、清と穢あり……と、いわゆる対立する価値の混在という状況に向けられたものでは決してない。ましてや、一部の論者が言うような反価値の賛美<sup>5</sup>などではない。この郷愁は、差異化によって生じるモノを秩序づけ統制する、方向付けられた力の働かない空間、美／醜、超脱／世俗といった諸価値の序列というもののない空間に向けられているのではないかと思われる。

おもしろいのは、〈我〉の郷愁が人・土地よりも高粱と高粱畑に有ることで

ある。つまり際限なく差異化がくりかえされ、しかもそれを統合する方向性を欠いた空間とは、高粱と高粱畑によって象徴されているといえるだろう。(我)が再度郷愁を語る『紅高粱家族』の最終部にはそれがよく現われているので、少し長くなるが引用したい。

このとき、高密県東北郷の黒土とこんもりとおおっているのも雑種の高粱だった。わたしが繰り返して賛美し歌い上げた、血の海のような紅高粱はもはや革命の洪水に跡形もなく流されてしまっていた。この紅高粱にとって変わったのは背が低くて、茎が太く、葉をぎっしりつけて、体じゅう白い粉だらけで、穂が犬の尻尾みたいに長い雑種の高粱だった。そいつらは収穫量が高く、味は渋くて、無数の人に便秘を起こさせた。……(中略)……

わたしは雑種の高粱をひどく憎んだ。

……(中略)…… 二奶奶の墓の前にたつて、わたしはこの醜い雑種がみっともなく紅高粱の地盤を占領しているのを見ていた。そいつらは高粱を名乗ってはいるが、高粱のすくっと伸びた高い茎をもってはいなかった。そいつらは高粱の名を名乗ってはいるが、高粱の輝く色合いをもってはいなかった。そいつらに本当に欠けているのは、高粱の魂と風格だった。そいつらは暗くてはっきりしない、どっちつかずな細長い顔で、高密県東北郷の清らかな空気を汚していた。

雑種の高粱にとり囲まれて、わたしは失望を感じた。

密集陣形を作っている雑種の高粱の中に立って、わたしは二度と帰らぬうわしい光景を思い続けていた。秋深い旧暦八月、空高く爽やかな大気の中で、見渡す限り的高粱が赤くなってかがやく血の海となる。秋の河が氾濫すれば、高粱畑は一面の海原となり、高粱は黄色く濁った水から暗赤色の頭をもたげて、かたくなに蒼天に訴えかける。太陽が顔を出して広大な水面を照らすと、天地の間は異常に豊かで、異常に壮麗な色彩にみたされた。

これこそが、わたしがあこがれ、永遠にあこがれ続けるに違いない究極の人間世界であり、究極の美の世界なのだ。

だがわたしは雑種の高粱に包囲されていた。その蛇のような葉が、わたしの体に絡みつき、その体中に流れる暗緑色の毒素がわたしの思想を毒した。わたしは逃れ難いくびきの中であえぎ、その苦しみに逃れられず悲しみのどん底へと沈んでいった。



そのとき、物寂しい声が果てしない大地の底から聞こえてきた。……（中略）……わが一族のすべての亡霊がわたしに謎めいた指示を発していたのだ。

白馬山の陽、墨水河の陰には、まだ一株の紅高粱が残っている。おまえはあらゆる努力を惜しまずにそれを探しだすのだ。そしてそれを高く掲げて、いばらが生い茂り、虎狼が跋扈するおまえの世界を渡るがいい。それはおまえの守り札であり、我が一族の栄えあるトーテム、わが高密県東北郷の伝統精神の象徴なのだ！  
（「狗皮」）

背が高く大海原のように広がる紅高粱の畑は、土匪のすみか（青紗帳）であり、その緑の帳で視界を覆いつくし、何が起こるか予想もつかない空間である。それは一点から見通すことつまり中心の存在を不可能にし、一定の序列のもとに構成されない空間、予測の立てられないゲリラ的空間ともいえるだろう。

現在大地を覆っている背の低い雑種の高粱、生産量上げる目的で導入された雑種の高粱では、この不均質不透明な空間を象徴することはできないのである。少し余談になるが、上の二つの引用部分にある「マルクス主義を一所懸命に学習して、ついに悟った」「紅高粱はもはや革命の洪水に跡形もなく流されてしまっていた」は、わたしにはとても風刺的に聞こえる。マルクス主義が逆にわたしの郷愁を浮き彫りにし、増産を目指した農業政策が紅高粱を一掃してしまったと読むなら、〈我〉の郷愁と対峙する意味の中心・統合の方向性を中国共産党の理論あるいはその支配システムと解釈することもできるだろう。

始めも終わりもなく、行ったり来たり、思いついたままいくらでも物語が枝分かれしていくこの小説の姿は、中心のない不均質不透明な空間への郷愁の表われかもしれない。

## 5

次に、〈我〉の郷愁が向かう「英雄世界」＝ゲリラ的・不均質不透明空間と、それを目指しつつも〈我〉が実際に語り得た「物語世界」がどのように食い違っているかをみておきたい。多くの読者はこの二つの世界を同一視している。いや、むしろ繰り広げられているのは〈我〉が希求する「英雄世界」のはずだと思っているに違いない。だからこそ、二つの世界の食い違いが食い違いではなく、「英雄世界」の作為性・偽物っぽさと受けとられるのである。

その偽物っぽさをいちばん感じるのは、〈我〉がそれまで寄り添って語って

きた物語に下す批評部分であろう。ここには郷愁が向かった世界とは反対に、〈我〉という視点と批評基準となる価値観、つまり中心と秩序が存在してしまっている。しかもそれは母性や祖先や故郷の幼稚な賛美だったり、旧習慣への紋切り型的反発だったり、批評というより既成概念の宣伝と化している。

足を縛る布は三メートルほど、曾祖母はその布で祖母の足の骨を締め上げ、八本の足指を足の裏にへし曲げてしまった。なんとむごい！ わたしの母も纏足だった。わたしは母の足を見るたびにたまらなくなって「封建主義を倒せ！人の足の自由万歳！」と大声で叫びたくなったものだ。（「紅高粱」）

祖母が切り紙をするときの奇抜な思いつきは、彼女がそもそも女傑であり、彼女だけが梅の花木を鹿の背に植える度胸があったことを示している。彼女の切り紙を見るたびに、わたしの中に自ずと敬意の念が生じる。祖母が文学をやっていたら、数多くの文学者どもをくその出るほど踏みつけていたことだろう。彼女は創造主であり、その言葉は絶対であった。（「高粱酒」）

ただ肝心なのは、ここに示された批評内容を検討することではなく、批評を物語に挟みこんでしまう語り手の在り方を見定めることのほうである。価値の方向性、さらに自我という中心を持たざるを得ない〈我〉自身が、高粱に象徴される不均質不均等空間と相いれない関係であるのは明らかだ。

もう一つわたしが注目したいのは、同じ祖父、同じ父でも、〈我〉によって語り出される英雄的な二人と、〈我〉が思い出す直接見知っている二人との落差である。〈我〉の覚えている祖父は回想にふけるかたくなな老人であり、父は考えの浅い子供じみた人間であり、どちらも賛美には程遠い。

祖父は墨水河大橋を見に行くのがとても好きだった。橋のたもとに立ち、橋げたの石に手をかけて午前あるいは午後のまるまる半日そこに立っていた。（「紅高粱」）

父の思想はいつでも現象の表面を漂い、あまり深入りすることがなく、だからゲリラに向いていた！ ……（中略）…… 父はこのような哲学的思惟の深みに達することがなかった。一九五七年、彼はさんざん苦勞して、母が掘った地下の穴蔵から抜け出てきたとき、二つの眼は少年時代のように活気、

混迷と、くるくる変化した。彼は生涯、人と政治、人と社会、人と戦争との関係を明確にとらえることができなかった。（「狗道」）

これは現在の〈我〉につながっている過去と、そうありたいと望む過去のきしみであるし、「英雄世界」と自分自身の繋がりを、直接体験によってさらに深めようとした〈我〉の意図が、逆に裏切られている証でもある。この小説は〈我〉が「英雄世界」との一体化を謀って語られ始めたものでありながら、語るほどに一体化が不可能であることを突きつけるような小説、語り手の意図を裏切っていく小説と言うことができるだろう。

---

#### 注 釈

（ テキストには解放軍文芸出版社版の『紅高粱家族』を用いた。  
また、引用部分は井口晃訳『赤い高粱』を参考にした。 ）

- \*1 残雪 「井戸の中の戯言」（訳：近藤直子） 『ユリイカ』 1990.9
- \*2 「狗皮」の主軸となる二奶奶が凌辱され香官が殺された事件は、その時期が小説内で整合性をもって書かれてはいない。断片的な記述から、一九三九年と一九三四年ごろの二つが考えられるが、より明確な記述の三九年の方を取った。
- \*3 たとえば、単行本『白綿花』に収められている「人與獸」は、祖父である余占鰲の北海道山中での逃亡生活を孫の〈我〉が語るものであり、短篇ではあるが“紅高粱家族”の六作目といえるだろう。
- \*4 平石淑子 「混沌を描く」 『中国当代文学研究会会報』第6号 1990.4  
「莫言ノート ―〈紅高粱〉の色彩について―」  
『中国文芸研究会会報』第100期 1990.3
- \*5 王干 「反文化的失敗」 『読書』 1988.10

莫言 主要著作リスト ( \* 印は二次資料による )

\* 小説……単行本

- 『透明的紅蘿蔔』 作家出版社 1986
- 「民間音楽」 <蓮池>83・5期 \*
- 「售棉大路」 <蓮池>83・3期 \*
- ( 転載 <小説月報>83・7期 )
- 「春夜雨霏霏」 <蓮池>81・?期 \*
- 「黒沙灘」 <解放軍文芸>84・7期
- 「三匹馬」 <奔流>85・12(9?)期 \*
- 「透明的紅蘿蔔」 <中国作家>85・2期
- 「大風」 <小説創作>85・6期 \*
- ( 転載 <小説選刊>85・8期 )
- 「枯河」 <北京文学>85・8期
- 「秋水」 <奔流>85・8期 \*
- 「老槍」 <崑崙>85・4(5?)期 \*
- 「白狗秋千架」( 雑誌掲載時の題名は「秋千架」 ) <中国作家>85・4期
- 「球状閃電」 <收穫>85・5期
- 『爆炸』 崑崙出版社 1988
- 「我的墓」( 序文 )
- 「爆炸」 <人民文学>85・12期
- 「金髮嬰兒」 <鍾山>85・5期
- 「草鞋畚子」 <青年文学>86・2期 \*
- 「断手」 <北京文学>86・3期
- 「白鷗前導在春船」 <小説創作>84・2期 \*
- 「雨中的河」 <長城>84・5期
- 「島上的風」 <長城>84・2期
- 『紅高粱家族』 解放軍文芸出版社 1987
- 「紅高粱」 <人民文学>86・3期
- 「高粱酒」 <解放軍文芸>86・7期
- 「狗道」 <十月>86・4期
- 「高粱殞」 <北京文学>86・8期
- 「狗皮」( 雑誌掲載時の題名は「奇死」 ) <崑崙>86・6期 \*
- 『歡樂十三章』 作家出版社 1989
- 「罪過」 <上海文学>87・3期

- 「飛艇」  
 「棄嬰」  
 「石磨」  
 「蒼蠅·門牙」  
 「貓事蒼萃」  
 「養貓專業戶」  
 「草鞋畚子」  
 「革命浪漫主義」  
 「凌亂戰爭印象」  
 「五箇鯉鯉」  
 「築路」  
 「歡樂」  
 『天堂蒜薹之歌』 作家出版社 1988  
 「天堂蒜薹之歌」  
 『十三步』 作家出版社 1989  
 「十三步」  
 『白棉花』 華芸出版社 1991  
 「遙遠的親人」  
 「愛情故事」  
 「你的行為使我們感到恐懼」  
 「父親在民伏連裏」  
 「白棉花」  
 「人與獸」
- <北京文學>87·12期  
 <中外文學>87·2期\*  
 <小說界>85·5期  
 <解放軍文藝>86·6期  
 <上海文學>87·11期  
 ?  
 <青年文學>86·2期\*  
 <西北軍事文學>88·3期\*  
 <虎門>87·1期\*  
 <當代小說>85·9期  
 <中國作家>86·4期  
 <人民文學>87·1—2期合刊  
 <十月>88·1期  
 <文學四季>88·冬卷\*  
 <時代文學>89·4期\*  
 <作家>89·6期  
 <人民文學>89·6期  
 <花城>90·1期  
 <花城>91·5期  
 ?

\*小說……單行本未收錄

- 「醜兵」  
 「因為孩子」  
 「金色鯉魚」  
 「放鴨」  
 「流水」  
 「紅蝗」  
 「玫瑰玫瑰香氣撲鼻」  
 「生蹠的祖先」  
 「復讐記」  
 「馬駒穿越沼澤」  
 「奇遇」  
 「懷抱鮮花的女人」
- <蓮池>82·2期\*  
 <蓮池>82·5期\*  
 <無名文學>83·5期\*  
 <無名文學>84·2期\*  
 <風流>85·2期\*  
 <收穫>87·3期  
 <鍾山>88·1期  
 <長河>創刊號88·10月\*  
 <青年文學>88·11期\*  
 <青年文學>88·11期\*  
 <北方文學>89·10期  
 <人民文學>91·7—8期合刊

- 「夢境與雜種」 <鍾山>92・5期
- \*ルポルタージュ
- 「美麗的自殺」 <解放軍文芸>86・1期
- 「高密之光」 <人民日報>87・2・1
- 「大音稀聲」 <崑崙>87・4期\*
- 「高密之星」 <人民日報>87年12月13日
- \*散文
- 「雪花雪花」 <花山>82・3期\*
- 「我和羊」 <花山>83・5期\*
- 「馬蹄」 <解放軍文芸>85・11期
- 「“大肉蛋”」 <文學自由談>86・1期\*
- 「狗、鳥、馬」 <中國作家>88・1期
- 「打靶歌」 <解放軍文芸>89・2期
- \*評論
- 「唯有真情才動人」 <文芸報>86・8月\*
- 「我想到痛苦、愛情與藝術」 <八一電影>86・8期\*
- \*創作談
- 「天馬行空」(署名…管謨業) <解放軍文芸>85・2期
- 「黔驢之鳴」 <青年文學>86・2期\*
- 「有追求才有特色——關於《透明的紅蘿蔔》的對話」 <中國作家>85・2期
- 「橋洞里長出紅蘿蔔」 <文芸報>85年7月6日\*
- 「〈奇死〉之后的信筆徐鴉」 <崑崙>86・6期\*
- 「也算創作談」 <鍾山>88・1期
- 「明知上帝在發笑、為甚麼還要思索」 <小說選刊>88・4期
- 「我的“農民意識”觀」 <文學評論家>89・2期\*
- 「我痛恨所有的神靈」 雜誌『莫言論』付録 中國社會科學出版社 1990
- 「難以捕捉的幽靈」 『白棉花』付録 華芸出版社 1991
- \*インタビュー
- 「中國の村と軍から出てきた魔術的リアリズム」
- (聞き手、訳：藤井省三) <海燕>92・4月号